

4 作業終盤の失念エラーに重要性認知が及ぼす影響

和田 一成

小倉 有紗

青木 大輔*

* 現 大阪総合指令所

1 はじめに

「買い物の帰りにポストに手紙を出そう」など、将来の行為に関する記憶を展望的記憶と言います。その行為が重要で、あらかじめわかっているときには、「必ず帰りに手紙を出すように。」など、周囲の人が声をかけたりするのが一般的です。これは、事前に注意喚起することによって本人の重要性認知を高め、当該作業の失念エラーを防ごうとしているからです。そこで今回の実験では、このように事前に重要性を強調することが展望的記憶の成績に影響するかを検討しました。実験では、パソコンを使った作業を用意し、事前に重要性を強調しておいた作業終盤の課題を忘れずに行えるかを測定しました。

2 内容

(1) 実験参加者

健常な一般男性 79 名（平均年齢 24.0 歳、 $SD = 4.0$ ）でした。

(2) 実験課題

実験で展望的記憶を測定する課題（以下、「PM 課題」とする。）は、一連の作業の最後の画面に出てくるチェックボックスのチェックを外して終了ボタンをクリックするというものでした（図 1）。実験参加者には、その前に行われる文字の並べ替え課題（「とはりやち」→「はやとちり」など）を連続的に行うことがメインの課題であると説明しましたが、実際には作業終盤の PM 課題を忘れずに行えるかを測定しました。

(3) 重要性の説明と実験の流れ

重要性の説明は、社会的な内容を強調する社会的重要な条件と実験手続き上重要と強調する機器動作重要な条件の 2 種類を用意し、PM 課題の説明の直後に行いました。また、比較のために、重要性は強調しない場合も 2 種類設定しました（表）。この 4 種類を実験の条件とし、実験参加者をいずれかの条件にランダムに割り振りました。

実験は、課題の説明（重要性教示）のあと、練習課題、本試行 8 回を行い、さらに、PM 課題をどのくらい重要と思っていたかについて 9 段階での評価を求めました。

なお、実験終了後に PM 課題が本当の課題であることを説明しました。

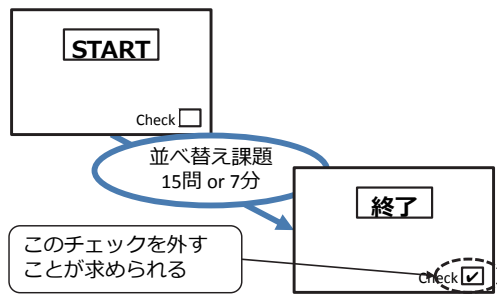


図1 PM課題

表 重要性教示の内容

条件名	重要性 強調	内容
社会的な重要	あり	チェック外しが、参加者の他者である実験者にとって重要
機器動作重要	あり	チェック外しが、実験機器の正常な動作のために重要
ボックス注意	なし	チェックボックスの場所や小ささを説明
統制	なし	追加説明はせず

(4) 結果

チェック外しの失念がどの程度起こったかを分析しました。その際に、失念行動（チェック外しを忘れて終了ボタンをクリックする）を2点、失念しかけの行動（チェック外しを忘れて終了ボタンに向かうが思い出してチェックを外す）を1点とするエラー得点を算出し、各条件のエラー得点の平均値を比較しました。

まず、教示条件ごとのエラー得点を分析したところ（図2）、教示内容による得点の違いは見られませんでした。一方、実験参加者の感じた重要性の影響を検討するために、重要性の評定値の高い群と低い群で分けてエラー得点を分析しました（図3）。その結果、重要性得点の低い群の方が有意にエラー得点が高くなる傾向が見られました（ $F(1, 56) = 2.83, p = .098, \eta_p^2 = .05$ ）。

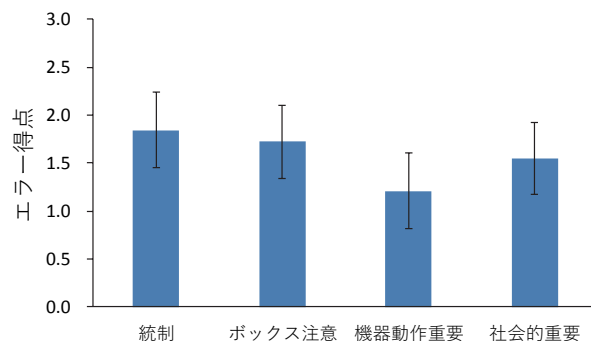


図2 各教示条件のエラー得点

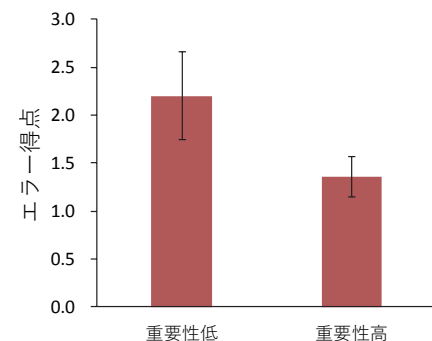


図3 実験参加者の感じた重要性の
高低別に見たエラー得点

3 まとめ

実験では、重要性の強調が作業終盤の失念エラーの発生に影響するかを調べましたが、重要性を強調するかどうかで失念に違いは見られませんでした。一方で、重要性の評定値の高低で分けると、高い方がエラーが少なくなる傾向が見られました。これらのことから、課題を重要だと思っていれば、失念エラーが起こりにくくなる傾向は示唆されましたが、どのような声掛けがエラー防止につながる重要性を高めるのかはわかりませんでした。作業中の失念エラーについて、今後も様々な検討が必要と思われます。